

# TIJ 日本語教育研究会通信

No.54 2014.5.31 発行

発行: TIJ日本語教育研究会事務局  
東京都葛飾区新小岩1-17-10  
Tel:03(5607)4100 /Fax:03(5607)4102  
E-mail: [tij@tij.ne.jp](mailto:tij@tij.ne.jp)  
TIJ ホームページ <http://www.tij.ne.jp>



新年度に入り、皆様の現場でもまた新しい学生を迎えたことと思います。TIJ も中国、ベトナム、スリランカ、バングラデシュから新たな学生が入学し、活気が増した感があります。

3月3日に TIJ 文化発表会を開き、上級クラスはプレゼンテーション、中級クラスはスピーチ、初級クラスは出身国の紹介を行いました。それぞれの指導者からそのご報告をさせていただきます。

4月末にインドネシアのジョグジャカルタで行われた留学説明会に TIJ が初めて参加しましたので、その報告を掲載いたします。

また、ロシアのサラトフ市在住の学生さんたちへのスカイプ授業に、臨時に参加させていただきましたので、その報告も掲載させていただきます。

## 【本号の内容】

1. TIJ の目的とアドミッションポリシー
2. TIJ 文化発表会の指導者の報告
  - ①上級クラス プレゼンテーション指導のご報告
  - ②中級クラス スピーチを指導して
  - ③初級クラス 出身国の紹介を指導して
3. 出張報告—留学生募集 インドネシア編
4. スカイプ授業に参加して

## TIJの目的とアドミッションポリシー

多国籍化を進めるにあたり、改めて TIJ の目的とアドミッションポリシーを策定しました。皆様よろしくお願いたします。

### TIJ の目的

- ・ 社会の役に立つ人を育てることを通して、国際社会に貢献する。
- ・ 学生が明るい将来を切り開いていくための支援をする。
- ・ 職員が協力し合う楽しいやりがいのある職場であり続ける。

### TIJ のアドミッションポリシー

TIJ の設立目的は「国際社会に役立つ人材を育てる」ことです。また、TIJ の職員・教師は本校で学ぶ学生の夢の実現を支援することで社会に貢献したいと考えています。そこで、本校では次のような学生を広く求めています。

- ・ 将来国際社会の一員として活躍する意欲のある人
- ・ 日本に興味を持ち、異なる文化や価値観に柔軟に対応できる人
- ・ 日本での留学生生活をまじめに送り、将来の夢に向かって努力し続ける強い意志を持っている人

## TIJ文化発表会の指導者のご報告

### —上級クラス プレゼンテーション指導のご報告—

3月3日の文化発表会において、上級クラスはプレゼンテーションを行いました。2月に入ってすぐ発表会に向けて準備を始めました。準備期間は4週間で全7回（1回90分）の時間を取り、進めていきました。選んだテーマについて調べ、原稿を書き、パワーポイントを使いながらの分かりやすいプレゼンを目指す今回の発表は、TIJの2年間の日本語学習の総決算であることを学生に説明しました。また、自分達が伝えたいと思うことを自分達の言葉で表現すること、中国人・留学生・若者など自分達ならではの視点や経験、考えを盛り込むことに重点を置いて指導しました。

中国人のみ16名のクラスを5つのグループに分け、発表テーマを考えるとところまでは順調に進みましたが、まだ先の話だと考えたのかなかなか具体的作業に入らないグループもありました。そこで、スケジュール表を作って、いつまでに誰が何をやるか具体的に考えてもらいました。自分達が思っているほど時間に余裕がないことが分かると、時間を無駄にすることなく自発的に取り組み始めました。本来は、準備作業も全て日本語で行うのが理想ですが、中国人だけのクラスでもあり、より効率的により深く議論できるように中国語の使用を許可しました。各グループが取り上げたテーマは「朝鮮族」「日本の包装」「日本のデザート」「制服」「チャイナドレス」でした。

5回目からは毎回プロジェクターを使用して、未完成であっても本番通りの発表形式で練習と修正を繰り返しました。他のグループの発表を見るときには、いい点とアドバイスを書いてもらいました。一応形になり安心してた学生も他のグループの発表を見ることで刺激を受けていましたし、発表後にはもらったメモをもとに熱心に対策を話し合っていました。教師のうるさい指導よりも、仲間の発表を見ることや仲間からのアドバイスのほうが彼らには効果があるようです。

今回のクラスは仲良しグループがなくクラス全体でまとまっているという特徴がありました。そのため、グループ分けも学生の希望でくじ引きで決めました。教師としてはメンバー構成に不安な面もありましたが、思わぬ学生がリーダーシップを発揮する等の発見もありました。これまで私の思い込みで活躍の場を狭めていたのかと反省させられました。

当日の発表は、緊張のあまり言葉がうまく出てこなかったり、スライドと説明がずれてしまったりと満点ではありませんでしたが、卒業を間近に控えた時期に仲間と協力してプレゼンをやり遂げられたことに満足げな彼らの表情を見られたことはとても嬉しいことでした。

祐川知子 (TIJ)

### —中級クラスのスピーチを指導して—

今年の文化発表会で中級クラスは、スピーチを行うことになりました。この時点で、中級クラスは、中級3、中級1A、中級1B の3つあり、それぞれのクラスでクラス予選をして2名代表を選出し、発表会当日はコンテストとして、各クラスの代表6名による決選を行うというものでした。

私が担当していた中級3クラスは、日本語の教科書としては、「上級で学ぶ日本語」に入ったところ。大半が2013年12月の日本語能力試験のN2に合格した、というレベルの学生たちです。

この学生たちは、前学期「はじめよう初中級」という会話教材で各課の最後にあるセクションで課のテーマに沿って、自分の考えを述べる短いスピーチ原稿を書き、クラスの前で発表する、という学習をしました。その際、毎年3月には、学校全体のスピーチコンテストがある、今やっている練習はその準備でもある、いい原稿を書くことと同時に、原稿を覚えて、人の前できちんと話す態度も重要である、ということを学生には伝え、彼らは全6課短いスピーチをクラスの前で発表することを経験しました。そのことをどのくらい意識していたかはわかりませんが、2月に入って、作文の時間にスピーチ原稿を書き、クラス予選に臨みました。

原稿が出そろった時点で、その内容によって、教師の側ではクラス予選の結果のある程度の見通しを立てることができました。あとは、個々の学生が準備、練習をして予選が行われたわけですが、この予選では、教師の予想とある程度合致する結果とともに、いくつかの「番狂わせ」がありました。一番の「番狂わせ」は、原稿の内容、日本語の正確さともに大変優れていて、クラス代表の一人はこの人か、と目された学生が予選当日原稿を十分に覚えておらず、得点を伸ばせなかったことです。一方、原稿の内容はふつうであった学生がその原稿をきちんと覚えて自分のものとしてスピーチしたことで、

聞く側に大いにアピールし、高得点を得た学生もいました。

このクラス予選は、クラスの学生全員と、教師二人によって判定されました。教師2名の持ち点は学生のものより多くしてありましたが、やはり多くの学生にアピールしたパフォーマンスについては、当然のことながら、高得点が出ました。ともすれば教師は原稿段階の精度と内容に目を向けがちですが、聴衆となって判定する学生にとっては、スピーチする学生の伝える力、パフォーマンス全体が大きな判断材料となるようです。

このクラス予選の結果、2名の代表が決定しました。この2名については3月3日の文化発表会までの約10日間、個別指導を行いました。

代表の一人、Yさんは、1月生として入学して、まだ2か月という、滞日経験の最も短い学生です。日本へ来てから日は浅いのですが、高校でも日本語専門、すでに2年前にN1を取得、その後も勉強を続けたという経歴の持ち主で、原稿の日本語の正確さも群を抜いていました。話す日本語の発音も明瞭で、スピーチとしてかなり完成度は高いという印象でした。ところが、実際に彼のスピーチを聞いてみると、完成されているという印象を持つだけに、語尾や接続のちょっとした間違いが際立ってくることに気づきました。原稿は、チェックしたはずなのに、どうして・・・と思って尋ねてみると、彼は自分の原稿を丸暗記しないことにしているのだと言うのです。丸暗記してしまうと、それを思い出すことにエネルギーが向かって、話し方が不自然になるからだとか。スピーチの運び、言葉の使い方は頭に入っているので、その場で自分の力で文を構築していく、という上級テクニックを使っているわけですが、本番、会場の場の力に圧倒されてしまうと、大失敗をするリスクも伴います。現に、教師の前で2度3度話してみただけでも、不安定でした。

彼なりのやり方のようなので、すぐにはそれを否定せず、2日、3日と練習をしました。その際、ボイスレコーダーで彼の発話を録音し、すぐにそれを再生しながら間違いを確認していきました。聞き直してみると、彼は自分の発話の間違いにほぼ全て気づき、正すことはできます。しかし、何回練習を重ねても、必ずどこかで小さなミスが見つかり、それ以上スピーチの完成度が上がらないことに彼自身が気づきました。

そこで彼は練習3日目を過ぎたところでやはり原稿が重要だという結論に自ら至り、再度自分の頭の中での原稿を書き出して、それをまずはそのまま覚えてくるということにしました。日本人でも要旨だけを決めてぶっつけ本番で話すというのは、要件を伝える目的は果たせますが、スピーチ全体を評価されるコンテストには向かないやりかたでしょう。やってみるまでうまくいかどうかわからない、というのは、本人の不安やストレスも大きいだろうと思います。Yさんの場合は自分で納得して原稿に立ちかえたことで、話し方、間の取り方、スピードなどにも気を配る余裕ができました。

もう一人のクラス代表Sさんは、自身の職場での体験を述べたスピーチの内容が多くの学生を勇気づけるものであり、さらに、一言一言大切に、聞く人に届くように堂々と語る態度が印象的でした。これはおそらく彼女が国での学校教育の中でスピーチのしかたの指導を受け、また多くのモデルに接してきたことから形成されたものだと思います。個別指導では、ともすれば不明瞭になりがちなくつかの言葉の発音の矯正、イントネーションの確認、語尾を最後まできちんと話すこと、などにポイントが絞られました。体調の波もあり、個別練習の回数は十分とれなかったのですが、彼女は自分でそのハン

デを克服して、立派に本番をやり遂げることができました。

スピーチというのは、読む、書く、聞く、話す、の四技能のうち、書く、そして話すこと、という二つのプロダクションの要素を必要とする言語活動です。受動的な、読む、聞くという技能に比べ、自分で文を構築し、発していくことは、多くの学生が難しさを感じるものであることも事実です。しかし、難しいこと、大変なことを通して得るものも多く、クラス代表となった2名だけでなく、自分のスピーチ原稿を頭をひねって書き上げ、予選に向けて準備したクラスのメンバー全員にとって多くの学びを得る機会であったと思います。そして、指導に当たった教師にとっても新たな発見を得た機会であったと感謝しています。

渡部尚子 (TIJ)

### —初級クラス 出身国紹介—

昨年まで続いた「文化交流祭り」が、今年は会場を葛飾区地区センターに移し「文化発表会」と題して、全学生が参加する大発表会となりました。

私が担当したクラスは、2013年10月（一部7月）に来日したベトナム学生10名、スリランカ2名、中国女性1名の計13名。日本語学習歴も短く、簡単な会話もなかなか定着しない「ゆっくり」クラスで、学習指導に四苦八苦していた時期でした。来日5か月のこのクラスの人たちが日本語でスピーチを書き発表する…??? まさに胃が痛くなるような出来事です。

しかし、やると決まったものをできないと断るわけにもいきません。他クラスの4月7月入学の学生たちは、スピーチ原稿を書き、クラス予選を経て、本選（発表会）に参加しますが、10月生にその力はないと判断し、国別にお国紹介をしてもらおうと考えました。そうと決めたら腹をくくって文化発表会の趣旨を説明し、出し物の内容を検討することにしました。勿論、このような高度な話は通じませんから、通訳の方の力を借りて説明し、ベトナムはお正月の歌、スリランカは童謡、中国は近代詩人の詩を朗読することになんとか決まりました。

ベトナムのお正月の歌は「私の故郷のテト（お正月）」というタイトルで、みんなお正月を楽しみにして準備をしているという歌です。

「Tết Tết Tết Tết đến rồi Tết đến trong tim mọi người。」

♪テトがやってきた、みんなの心にやってきた♪

ノリの良いリズムカルな曲で、一度聴いたら1日中そのフレーズが頭から離れないような魅力的な歌です。この歌詞を日本語に訳し（てもらい）、1人が1文ずつ紹介してから歌を歌うことにしました。

♪お正月の準備をしましょう。

きれいに掃除をしたり、料理をしたりして、いろいろ準備をします。

買い物に行って、ご馳走をたくさん買います。

友だちのうちへ遊びに行って「新年おめでとう」と言います。

子どもにお年玉をあげます。

お金持ちになるといいねと言ってみんなの幸せをお祈りします♪

練習を重ねるうちに面白いことに気が付きました。クラス全体で考えたり練習したりしている時は、ワイワイガヤガヤ大騒ぎで大変うるさいのですが、いざ、前に立って1人ずつ言うとなると、とたんに“固まって”しまうのです。10人が10人とも、ほぼ直立不動、視線は空を泳ぎ、覚えた日本語を絞り出すように話します。その必死の形相と普段の姿とのギャップに、外国語を人前で発表することのプレッシャーに思い至りました。

スリランカの学生2人は童謡を簡単な日本語になおして発表しました。南国スリランカは明るくノリの良い歌だろうと予想していましたが、意外にも、柔らかい雰囲気の良い歌で日本人も郷愁を感じるようなメロディーでした。

♪大きい蝶は上の枝、小さい蝶は下の枝

大きい蝶も小さい蝶も2羽が庭にいる♪

本来がその曲調なのか、彼らの音取りのせいなのか、短調の優しい響きがします。この2人は前に出て歌うとき、全く動ぜずいつもの表情で楽しそうに歌っていました。緊張、必死などの言葉は彼らには縁がないように感じました。

このように人前に出た時の反応の違いは意外な発見でした。お国での教育スタイルの違いが現れているのかもしれませんが、お国柄、という言葉で一括りにできるものではありませんが、今後の日本語指導の過程で心の隅に置いておかなければならない貴重な情報を得たように感じました。

今回は「日本語が拙いクラスの発表をなんとか形にしたい」という私の思い入れが強かったからか、思い通りに動かない学生たちにいらだちを感じたことも多々ありました。でも、発表会を2週間後に控えた頃、ようやく肩の力が抜け（実はあきらめた！）、彼らにすべて任せるようにしたのです。「pptはお任せするね」「練習のリーダーになってね」「協力お願いね」。これらの言葉が自然に口から出るようになってから、練習はスムーズに進み、なんとか発表の目途が立ちました。当たり前のことですが、信頼関係が築ければ、お互い力を尽くすものなのですね。

毎年、発表会の後には反省点が数々見つかります。それを自分なりに検証した後、次の目標を立てます。学生にすべてを委ね、自主的に動いてもらいながら実はしっかりコントロールする。これが目標ですが、叶えられるかどうか、来年を楽しみにいたします。

北内直子 (TIJ)

## 出張報告 留学生募集！インドネシア編

TIJの留学生多国籍化計画が実行されてから2年目の現在、TIJでは中国、韓国、ベトナム、スリランカ、ネパール、バングラデシュの6か国の留学生が学んでいます。留学コース以外の学生を含めるとフィリピン、インド、イギリス、フランス、ベルギーなど10か国を超えました。今後さらに多くの国からの学生に来ていただくべく、ホーム

ページの多言語化などにも取り組んでいるところです。今回は、4月26日にインドネシアの古都ジョグジャカルタで開かれた留学フェアに、市川と阿字地が参加してまいりましたので、その概要とジョグジャカルタで見聞き印象に残ったことをご報告したいと思います。

インドネシアに行くのは初めての二人です。インドネシアってどんなところなのでしょう。人々の暮らしはどのようなものなのでしょう。日本への留学を希望する人たちはどんな動機なのでしょう。その中で実際に来日できる可能性のある人はどのぐらいいるのでしょうか。様々なことを考えながら日本を出発した私たちが待っていたのは・・・。

### <留学フェア>

留学フェア当日、開始1時間以上前から学生たちは集まり始め、会場ではJポップのBGMが軽快に流れ、秋葉原や原宿、銀座などの若者の興味のあるような場所のスライドを映し雰囲気盛り上げていました。



留学フェア参加者は日本留学に関心を持っている高校生及び大学生を中心に約250名。全体の構成は①TIJ及び八王子の日本語学校、群馬の日本語学校のパワーポイントによるプレゼンテーション②千葉、旭川、栃木の日本語学校と専門学校のスライドによる紹介③質疑応答④ビンゴゲーム⑤ブースでのパンフレット配布と個別の質疑応答でした。

質問の内容は「大学で児童教育を学んでいるが、どのようにすれば日本の大学院に進めるか」、「高校を卒業して日本語学校に留学したら、どんな奨学金がもらえるか」「3年の短期大学生で福祉を学んでいるが、日本の大学に編入できるか」「アルバイトはすぐ見つかるか。アルバイトだけで留学生活が賄えるか」など。

ジョグジャカルタは大学の多い町で教育レベルは高いと思われませんが、そこで日本語を学んでいる高校生や大学生は多く（会場となった大学にも日本語科あり）、簡単な会話のできる学生がたくさんいました。また、若者には日本のアニメやアイドルが浸透していて、日本に対する興味があり、日本留学へのモチベーションの高さを感じられました。我先にとパンフレットを奪いとっていきような人は皆無で、静かに並び、お礼もき

ちんと言うマナーの良さも見られました。

一方で、日本との経済格差が大きく、一般家庭で親が日本留学の費用を準備するのは難しいと思われました。また、のんびりした国民性で、物事を時間通りに早く行うという習慣がなさそうだったり、女性はまじめそうですが小柄で幼く見えたりして、日本でのアルバイト生活に耐えられるのかという不安も感じました。

#### <町のようすから>



留学フェア翌日は日曜日でした。せっかく来たので世界遺産と街の観光。早朝のボロブドゥール遺跡で日の出を見ました。暗いうちに遺跡の上まで登り、だんだん夜が明けるにつれて森の中から浮かび上がってくる荘厳な景色に圧倒されました。現地は旅行シーズンではないそうで、他の世界遺産のある観光地に比べて静かでしたが、それでも日本人の旅行者を案内する現地ガイドの流暢な日本語がチラホラ聞こえてきました。王宮で私たちを案内してくれたガイドも語彙が豊富で詳しく丁寧にいろいろ教えてくれました。現地では観光ガイド・日本語を教えている先生たちなど日本語を学び仕事に結びつけているけれど日本へは一度も来たことがなく、一度来たいと考えている人も多いようでした。

昼ごはんを食べに入ったショッピングモールでは、運転手付きの車でベビーシッターを引き連れて家族で買い物に訪れる富裕層の人々を見ました。モールに展示されていた車は1億5千ルピア。一般的な若い会社員の平均月収は100万ルピアだそうですから、それを購入できるのはどんな人たちか想像できると思います。因みにインドネシアの義務教育は中学までで、高校へ行かない場合ベビーシッターなどの仕事に就くそうです。高校進学者は70%程度で卒業後は工場働く場合が多いとのこと。大学進学者は40%程度で卒業後すぐに仕事が見つかるのはそのうちの50%程度だということです。

#### <日本語学校視察>

最終日、ジョグジャカルタ市内の日本語学校を視察しました。学生たちがいつでも日本語に触れられるようにと、校内には日本のマンガやDVDがたくさん置かれていました。定期的に日本のDVDの上映会もしているそうです。授業は「みんなの日本語」をもとに現地の学校の先生が編集した教材で、主に初級を学んでいるということでした。視察だけの予定でしたが、私たちも授業に飛び入り参加させていただきました。授業の後もすぐ帰る学生はおらず、残って私たちを囲み、目を輝かせながら熱心に、日本語で



いろいろな質問が続きました。また、日本語でキロロの「未来へ」を歌ってくれました。



インドネシアってどんなところなのでしょう。人々の暮らしぶりはどのようなものなのでしょう。日本への留学を希望する人たちはどんな動機なのでしょう。その中で実際に来日できる可能性のある人はどのぐらいいるのでしょうか。様々なことを考えながら日本を出発した私たちを待っていたのは、そんな未来への夢に輝く若者たちでした。彼らの夢の実現のためにどのように力になることができるのか、TIJの多国籍化の中にインドネシアの学生をどうすれば参加してもらうことができるか、これから検討していきたいと思います。

阿字地道代 (TIJ)

## スカイプ授業に参加して

新小岩在住のSさんがやっぴらっしゃるロシア人学生に対するスカイプ授業にTIJの教師3人が参加させて頂き、TIJの紹介プレゼンテーションと学生さんたちとの会話を行いました。

Sさんは以前ロシアに住んでいらして、ロシア人に日本語を教えていらっしやいましたが、帰国後はスカイプを通じて週2回ロシア国内にいるロシア人に日本語を教えていらっしやいます。学生さんたちに日本留学への夢を持たせ、日本語学習へのモチベーションを強くしたいと常々お考えで、今回TIJでスカイプ授業を行ってくださることになりました。

午後5時20分にスカイプをつないだところ、すでにサラトフ市のナスチャーさんのお宅のパソコンの前に、8人の女性が集まっていました。また、モスクワから特別参加のアンドレーさんも、すでにパソコンの前にすわって今か今かと待っていらっしやる様子でした。「こんにちは」「こんにちは」とスカイプであいさつを交わしましたが、一人一人の声が想像以上に鮮明に聞こえたので、ちょっと驚きました。

以下が当日のスケジュールです。

- ① T I J の紹介プレゼンテーション 17 : 30～17 : 50
- ② 質疑応答 17 : 50～18 : 05
- ③ 学生さんたちとT I J 教師の会話 18 : 05～18 : 35
- ④ S さんのスカイプ授業 18 : 35～18 : 50

#### <T I J の紹介プレゼンテーション>

英語のT I J 紹介スライドショーを流しながら、日本語でT I J の紹介を行いました。  
広瀬：私たちの学校T I J 東京日本語研修所は 1991 年にできた学校です。今年で 24 年目になります。皆さん、今の日本語がわかりましたか。

学生たち：はい、わかりました。

学生さんたちは現在「みんなの日本語」の 37 課あたりを学習中とのことですが、英語の画面を見ながらとはいえ、こんな言葉で始まった日本語の説明に一斉に元気よくわかりましたと答えてくれました。以下、理解がむずかしそうなときはS さんがロシア語に訳していただきましたが、ほとんど日本語でわかったようでした。すばらしい！

#### <質疑応答>

学生 1 「質問があります」

S さん「はい、何ですか」

学生 1 「T I J のお金はいくらですか」

日本留学はまだまだ先のこととお聞きしていたので、いきなり費用の質問が出ていささか面喰いました。入学時に必要な費用を伝えましたが、あちらのお金にすると相当の大金のようでした。さらに

学生 2 「アルバイトはできますか。」

と現実的な質問が続きました。やはり気になるのはお金のようでした。

#### <学生さんたちとT I J 教師の会話>

8 人の女子学生とオブザーバーとして参加したアンドレーさんに、3 人のT I J 教師が交代で約 10 の質問をしました。学生さんと言っても、英語教師あり、ダンス教師あり、会社員あり、皆さんれっきとした社会人であることがここにきて判明しました。アンドレーさんはロシア国内のコンピューター技術コンテスト第 2 位とのこと。

教師：いつ日本語の勉強を始めましたか。

学生たち：2 年前に始めました。私は 1 年半前に始めました。3 年前に始めました。

教師：日本語の勉強はどうですか。

学生たち：面白いですが、むずかしいです。

教師：何がむずかしいですか。

学生たち：漢字がむずかしいです。文法がむずかしいです。

教師：日本の食べ物を食べたことがありますか。

学生たち：はい、すしロールを食べました。うどん、そば、ラーメンを食べました。・・・

教師：どこで食べましたか。

学生たち：サンクトペテルブルクのスーパーですしロールを買いました。うちでうどん

を食べました。自分でラーメンを作りました。

教師：日本でどんなことをしたいですか。

学生たち：日本でダンスを教えたいです。いろいろなところへ行きたいです。日本人と話したいです。など...

およそ 30 分でしたが、とてもスムーズに進み、楽しい会話となりました。

< S さんのスカイプ授業 >

「みんなの日本語」37 課の本文と練習 C の授業を参観しました。S さんは週 2 回 1 時間半ずつスカイプによる日本語授業をやってらっしゃるとのことですが、学生の皆さんがきれいな日本語で積極的にロールプレーをやる様子を見て、びっくりしました。ふだん日常生活の中では、日本語を使う機会はないそうですが、それでもこれだけ日本語が話せるようになるのはどうしてでしょうか。少人数で音声中心の授業をしていらっしゃるからでしょうか。S さんがロシア語で文法説明などをしていらっしゃるの、理解しやすいのでしょうか。中学校で週 4、5 回英語の授業を受けても話せるようにならない日本の中学生とどこが違うのか。大学時代、90 分のロシア語授業を週に 6 回受けても、読めるようにこそなったとはいえ、使えるようにはならなかった自分自身の経験と照らし合わせると、疑問は深まるばかりです。

「外国語が使えるようになるためには、その国に行って生活をしながら身につけるほかない」と思っていたのですが、その考えを改めざるを得ない現実を目の前にして、外国語学習の奥深さをかみしめています。

広瀬万里子 (TIJ)